Review of Economics and Information Studies Vol.15 No.3•4 March 2015

【研究ノート】
岐阜県高山市の福祉観光政策の評価と展望†
－文献調査の結果と今後の研究方向－

伊　藤　　薫*

概　要

筆者の岐阜県高山市の福祉観光政策に関する今後の主な研究課題は、（１）2003年から現在までの福祉観光政策（バリアフリー施策）の展開を整理し、（２）果たして福祉観光政策が成果を挙げてきたか否かを検証し、（３）今後の一層の発展を図るには福祉観光政策をどのように展開したら良いかを考える、ということである。

本研究ノートの研究課題は、その準備として、以下の３つの課題に取り組んだ。

研究課題１：筆者の飛騨地域、高山市に関する先行研究を整理すること

筆者は14本の著作論文があるが、①人口移動と地域経済の研究、②観光地の特徴の研究、③観光地間と観光地内の競争と協力の実態把握、④観光産業の中小企業の研究、⑤観光消費額の経済波及効果の研究、⑥外国人観光客増加に関する研究、⑦統計データによる実態把握の研究がある。

研究課題２：高山市観光に関連する先行論文あるいは一般文献を整理すること

学術論文として26本を見出し、一般的な文献として42本を確認した。1990年代から2010年頃までは障がい者や高齢者のバリアフリーに関する報告が多いが、2005年頃から外国人観光客に関する報告が増加した。本研究で見出したバリアフリー観光の初出文献は、山本誠（1998年）である。モニターツアーが始まったのは1996年であるので、その２年後に一般の文献が登場していることとなる。

研究課題３：今後の福祉観光政策を展望すること

今後の研究課題を以下の３課題について検討した。今後の研究課題１：高山市の「福祉観光」（バリアフリー観光）の経過と実態の整理、今後の研究課題２：高山市においては、障がい者、高齢者の観光客が実際に増加したどうかの検証、今後の研究課題３：今後の取り組み方向の検討。これらの研究課題について、観光客（需要サイド）と観光産業である旅館・ホテルなど（供給サイド）のそれぞれについて、取材による接近、統計データの分析による接近などの検討を行った。

---

†　本研究は、平成26年度岐阜聖徳学園大学経済情報学部研究助成（特別研究）（研究課題：岐阜県と東海地域の産業と人口に関する基礎的研究（その５）、研究代表者：伊藤薫）を使用して実施した。本報告のために高山市役所をはじめとする高山市観光の各機関、また国立国会図書館、千代田区立日比谷図書館など多数の方々にお世話になった。記して感謝いたします。しかし言うまでもなく、本報告に含まれる誤りは、全て筆者の責に負うものである。

＊　岐阜聖徳学園大学経済情報学部。連絡先：kitoh@gifu.shotoku.ac.jp

1．高山市観光の経過と研究課題

岐阜県高山市は、第二次世界大戦後の日本で最も観光開発に成功した都市の一つといえよう。高山市観光統計によれば、旧市域の観光入込客数は1970年に660千人であったが、2008年には3,118千人に達した。250万人ほどの増加を実現したこととなる。

高山市は観光資源に恵まれた古い町である。その魅力は、例えば昭和38年（1963年）に雑誌『暮しの手帳』において高山が「山の向こうの町」と紹介され（花森安治（201)、以下（）内の番号は、巻末の文献リストの文献番号による)、これが飛騨地域の観光の発展にとって大きなきっかけとなった。次第に新聞やテレビなどで取り上げられるようになり、「素朴な町」、「心のふるさと飛騨高山」として紹介され、交通環境改善とともに観光客は増加してきたという。そしてその前年の昭和37年（1962年）から「こども会」の手で市内の清掃活動が始まったが、汚れが目立ってきた宮川の清掃活動や魚の放流活動が、大人たちの町を美しくする活動、町並み保存に発展した、という（伊藤薫（７))。高山の観光資源は、市民の手で守られ、維持されてきたといえる。

しかし山本誠（214）によれば、高山市の入込観光客数は1990年に252万人いた観光客が、1993年には208万人に急減した。この減少を契機に、当時の新市長であった土野守氏が観光客の増加策を相談するアドバイザーとして山本誠氏を招へいした。山本氏は、日本の高齢化が進行することに着目して、高山市の観光施策の進むべき方向として、バリアフリー観光を打ち出した、という。そして手本になる先行例がないために、1996年から高山市が自らモニターツアーを始めたという。幾多の試みもあって、2002年の観光入込客は318万人に達した

山本誠（214）は、2003年までの経過を詳しく記しており、研究論文や一般記事にしばしば引用されてきた。しかしその後の展開についてのまとまった記述はないように見受けられる。21世紀において日本は一層の高齢化が進行することが確実である。国立社会保障・人口問題研究所の予測によれば、日本人口の減少が予測される中で（2010年12,806万人から2060年8,674万人)、65歳以上の高齢人口は、2010年の2,948万人（23.0%）から2060年に3,464万人（39.9%）に達すると予測されている。そこで観光地にとっては高齢観光客をどれだけ獲得できるかが、今後の重要課題となっている。

高山市は2003年に制定された高山市第５次総合計画において「住みよいまちは、行きよいまち」という優れた基本理念を掲げている。高山市のバリアフリー化によって、市民の暮らし良さ、生活水準を高めると同時に、観光客の増加を図り、地域の経済を豊かにする試みである。こうした高山市の福祉観光の取り組みは日本の先進例であり、今後の地方圏の観光地のあり方の一つを示すものである。近年では、バリアフリーの試みは外国人観光客に対する情報バリアフリーにまでその範囲を拡大し、外国人観光客の誘致にも効果を上げてきている。

以上を背景として、筆者は高山市の福祉観光政策の評価と今後の展望を今後の重要な研究テーマとしたいと考えている。すなわち今後の研究の主な研究課題は、（１）2003年から現在までの福祉観光政策（バリアフリー政策）の展開を整理し、（２）果たして福祉観光政策が成果を挙げてきたか否かを検証し、（３）今後の一層の発展を図るには福祉観光政策をどのように展開したら良いかを考える、ということである。

本研究ノートでは、その準備として以下の３つの研究課題に取り組みたい。

研究課題１：筆者の飛騨地域、高山市に関する先行研究を整理すること

研究課題２：高山市観光に関連する先行論文あるいは一般文献を整理すること

研究課題３：今後の福祉観光政策を展望すること

今回の研究準備で行った文献の主な収集方法を概説する。

方法１：国立国会図書館の NDL-OPAC で検索する。

方法２：国立情報学研究所の CiNii で検索する。

方法３：各地の図書館における開架図書で検索する。

方法４：学会誌、大学の紀要のバックナンバーを検索する。

方法５：各論文の引用文献、参考文献から検索する。

方法１と方法２は、オーソドックスな文献検索方法である。図書や雑誌論文は、この２つの方法によって国会図書館でかなり集収可能である。雑誌論文の場合は、PDF ファイルを Web 上で入手して印刷が可能なことがある。方法３は、図書名に高山市、飛騨がないが、バリアフリー、ユニバーサル、旅行などの名称があって、その本文内の一部に高山市の福祉観光に記述がある場合の検索方法である。図書館や書店の旅行、福祉などのコーナーで、思わぬ発見があることがある。方法４は、現在の主要な観光関係学会あるいは福祉まちづくり学会の学会誌を検索する方法である。経済学、経営学、社会学などの研究方法を論じた論文、またサーベイ論文を見出すことがある。関係の学会としては、日本観光研究学会、日本観光学会、総合観光学会、観光まちづくり学会、日本国際観光学会、日本観光ホスピタリティ教育学会、日本福祉のまちづくり学会がある。また主要な大学観光学部からは、それぞれ紀要が刊行されている。

上記の方法１から方法５を用いて、冊子の現物あるいは論文のコピーを入手するように努めたが、なお未入手のものが一部残された。

今回の文献収集では各研究分野の研究方法やサーベイ論文についても先行研究を収集したが、現時点では不十分なので掲載しなかった。また「広報たかやま」や「高山市議会議事録」、また地元の地域紙「高山市民時報」や各新聞の新聞記事などの関係記事の収集は今後の課題である。

2．伊藤薫の飛騨地域・高山市の先行研究

文献リスト１を参照されたい。筆者は地域経済学の立場から飛騨地域、高山市の研究を進めてきた。

筆者の飛騨地域・高山市の研究は、人口移動研究から始まっている（伊藤薫（１、２、３、４））。地域経済学では、地域の成長を人口増加でもって判定することが多いが、人口移動は地域の人口を増減させる直接的な要因であり、また移動者に10歳代後半から20歳代が多いために、後日、出生行動を通じて一層増加あるいは減少を引き起こす累積的な人口現象である。岐阜県飛騨地域の人口と経済を包括的に概観した論文が伊藤薫（５）である。近年の飛騨地域においては、人口の自然減と社会減の両者の要因で2002年頃から人口減少のスピードが速くなった。そして社会減の大きさは、人口１人当たり地域所得の全国水準値の上昇・低下とほぼパラレルであり、経済力の低下が人口の流出超過を引きこしていることが明確である。次に飛騨地域の市村の観光の実態研究に移り、白川郷と下呂温泉（伊藤薫（６））、高山市（伊藤薫（７））について調査した。飛騨地域の観光産業の特徴は、①優れた観光資源を有していること、②地元の多大な熱意によって観光資源が守られ、育てられてきたことである。

その後、飛騨地域の経済力を決定する主産業の観光産業の研究に進んだ。伊藤薫（８）は、一般に経済活動においては「競争」と「協力」が同時に並行して行われているが、飛騨地域の観光産業においても、観光地相互の「競争」と「協力」がみられ、また観光地内でも「競争」と「協力」がみられることを論じたものである。観光産業内では中小企業の存在が大きいが、その「競争」と「協力」について論じたものが、伊藤薫（13、14）である。なお中小企業研究において、観光に着目した分析は従来ほとんどなかった。飛騨地域の観光消費額の経済波及効果の測定は飛騨地域産業連関表を使用することが望ましいが従来は作成されていなかった。金子英文氏が初めて作成した飛騨地域産業連関表を利用して計算した結果、観光消費額の増加とほぼ同額の GDP（付加価値）の増加が算出された（伊藤薫（９））。近年の観光産業の大きな動向の一つは外国人観光客の増加である。飛騨地域において、外国人観光客の増加が可能であるが条件があることを論じた論文が伊藤薫（10、11）である。最後に、観光客の実態分析に使用する統計データを吟味しながら全国と飛騨地域の観光客の実態を検討したものが伊藤薫（12）である。

これらの研究のうち、政策に関連するものは、中小企業研究（伊藤薫（８、13、14））と外国人観光客の増加策（伊藤薫（10、11））である。

3．高山市のバリアフリー観光に関する先行研究

文献リスト２を参照されたい。本節では、学会誌などに掲載された高山市のバリアフリー観光などに関する研究論文をサーベイする。研究論文の数が少ないために、範囲を広げてまちづくり関連の研究論文も含めて掲載した。合計で26件にのぼる。

バリアフリー観光に関する初出論文は、現時点では宮井久男（105、2000年）である。モニターツアーが始まったのは1996年であるので、その4年後に研究論文が登場していることとなる。

これらの研究論文のうち、森田美佐子・川原晋（113）の研究は、最も新しく、また包括的な実態把握となっているので、その内容を簡単にみてみよう。この論文の「表１　高山市のバリアフリー施策とインバウンド施策、およびモニターツアー内容の傾向」は、過去の全体像を概観するのに有用である。著者は、以下の4点を「高山市が質の高いバリアフリーの観光地を達成できた要因」としてまとめている。

第１は、インバウンド施策と福祉観光都市というバリアフリー施策の２つの観光関連の施策を統合したことにより、観光地におけるバリアフリーの先進的な考え方「観光バリアフリー」がうまれたこと。第２に、その具体的な実践として、モニターツアーが継続的に取り組まれ、特に初期においては具体的なバリアフリー整備やソフトの取り組みに有用な情報を与えたこと。第３に、行政による積極的なプロモーション活動により、バリアフリーの観光地として認知されたこと。第４に、そうした行政の動きに呼応して市民の側にも、独自に市民や観光客のニーズに対応した取り組みがあったこと。

4．高山市のバリアフリー観光などに関する一般的な文献

文献リスト３を参照されたい。バリアフリー観光に直接関係のある文献のほかに、高山市観光に関連する文献を含んでいる。合計で42件にのぼる。

収録された文献は幅広いが、以下のタイプに分かれる。

タイプ１：高山市関係者による現状報告あるいは記録
タイプ２：一般雑誌に掲載された高山市のバリアフリー観光の記事
タイプ３：冊子内の一部に記述された高山市のバリアフリー観光の記事
タイプ４：その他（観光案内、旅行案内など）

タイプ１のうち、最も著名なものは、山本誠（211）である。1996年から2003年までのモニター旅行に関連して、なぜバリアフリーのまちづくりが始まったか、モニター旅行がどのように進行したか、などが詳しく述べられている。広範に引用されている基礎文献である。

タイプ 2 の例としては、花森安治（201）がある。この文献は、バリアフリーに関する記述はないが、大変優れた高山市の紹介として著名であり、高山市が全国に知られるきっかけを作った、といわれている。記事に署名はないが、『暮らしの手帳』誌の編集長であった花森安治の手になるものといわれている[1]。

タイプ 3 の例としては、宮井久男（209）、井上滋樹（214）がある。これらは書名に「高山」がなく探しにくいが、あちこちの図書館での開架図書の検索で見出すことができた。宮井久男（209）のように研究論文としても分類が可能な文献がある。

文献リスト 3 をみると、バリアフリー観光の初出文献は、山本誠（207、1998年）である。モニターツアーが始まったのは1996年であるので、その 2 年後に一般の文献が登場していることとなる。以上の文献のうち2000年代はバリアフリー関連の文献が多いが、2000年代後半から2010年代は外国人観光客関連の文献が多くなってきていることが分かる。

5．今後の研究方向の展望

バリアフリーは、現在、非常に学際的な研究分野となっている。もともとは建築学の概念であって、日本建築学会が1973年 9 月にまとめた『障害者・老人を考慮した建築・設備等関連文献目録　昭和30年～昭和53年度・日本編』[2] は、昭和35年刊行からの文献を収録している。しかし関連図書が多く刊行され、一般にバリアフリーが認知されてきたのは、1990年代半ばからといってよい。近年では、建築学以外からも幅広い学問分野で研究されるようになっており、例えば日本福祉まちづくり学会の加入者は、社会福祉学のみならず、観光学、法律学、経済学、行政学、医学、建築学、都市計画学など多様な加入メンバーを擁している。

（公財）日本交通公社の梅川智也理事によれば、日本観光研究学会は観光系学会で最大規模の900名の会員を擁するが、この学会の近年の研究報告のテーマは、①東日本大震災以降の災害復旧と観光、②観光教育・インバウンド・食、③聖地・祭礼・遷宮・世界遺産が中心であり、④観光統計・観光経済、IT 関連は減少している、という[3]。

障害者・高齢者の旅行については、関係者を分類すると以下のようになろう。

A：旅行サービスの需要者は、①旅行者（障害者・高齢者本人及びその家族、介護者）である。

B：旅行サービスの供給者は、②旅行会社、③到着地の観光産業企業、行政、④出発地と到着地の間の交通機関である。

C：最近では旅行者を援助する活動をしている、⑤出発地での援助団体（NPO など、例：世田谷区移動支援センター）と⑥到着地の援助団体（NPO など、例：NPO 法人伊勢志摩バリアフリーセンター）が活躍するようになっている。

以上の旅行関係者を念頭において、筆者の今後の研究課題、研究計画を展望しよう。

今後の研究課題１：高山市の「福祉観光」（バリアフリー観光）の経過と実態の整理

この研究課題における旅行関係者は、上記③の高山市役所、観光協会、ホテル・旅館・民宿の組合、個々のホテル・旅館・民宿である。これらの関係者が1996年のモニターツアー開始以来、高山市のバリアフリーづくりを通じて、①の障害者・高齢者本人及びその家族、介護者の旅行がいかに実現したか、の検証が課題である。

研究方法は、①文献調査と②取材である。

①の文献調査については、高山市の「福祉観光」（バリアフリー観光）に関する研究論文、行政報告、一般の雑誌記事が、文献リスト２、文献リスト３のように現在までに約70点ほど判明しており、入手済みであって経過が追跡可能である。

②の取材の対象者は、旅行サービスの供給者サイドの旅行サービス会社、高山市役所・観光協会の関係者、バリアフリーに取り組んできたホテル・旅館がある。高山市では街中の道路に目の細かいグレーチングや段差のない歩道を始め、多数の工夫がある。また車椅子での利用が可能な多数のトイレがあって、掃除が頻繁に行われている

高山市の三町の古い町並みを訪問すると、車椅子で店の奥まで入れるようになっている家屋が多い。敷居がないのである。敷居がある場合には、補助木がセットされていて車椅子でも乗り超えられる工夫がある。こうした地元の人々の努力が、三町の古い建物でどのように実現したかは（自主的か、役所の指導か）、興味深い研究テーマである。

ホテルの例としては、高山グリーンホテルが熱心に取り組んでおり、ユニバーサルルームを持っている。また老舗旅館の花兆庵は、障害者の接客で定評がある。

外国人については、情報バリアフリーの観点で取り組まれてきており成果が挙がっている。地元の努力の一例として、JR 高山駅の濃飛バスセンターの女性職員は、切符を販売する時に、全員が英語を話し、少数だが中国語でも話せる方がいるという（筆者の取材による）。

供給者サイドばかりでなく、並行して旅行サービスの需要者サイドである高齢観光客、障がいを持った観光客、外国人観光客の取材も実施する。旅行者が何を求めているかを知ることは、研究の重要な基本情報の一つである。

以上のように、充実した取材が期待できる。

今後の研究課題２：高山市においては、障がい者、高齢者の観光客が実際に増加したどうかの検証

研究課題２は、高山市の観光入込客のうち、①障がい者の増加の動向と②高齢者の増加の動向が課題である。

①については、数値的把握はおそらく困難であろう。しかし、バリアフリーに熱心なホ

テル・旅館では、障がい者増加の事実を取材で聞かせていただくことは可能であろう。

②は、「高山市観光統計」の分析で、数字的な把握が可能である。「高山市観光統計」は、長期にわたるアンケート葉書調査の結果を公表しており、観光客の男女別・年齢別の割合が経年的に分かる。

①②の作業の結果を使用して、高山市経済への貢献を測定する。筆者には飛騨地域産業連関表を用いた経済波及効果の測定の研究成果がある（伊藤薫（９）参照)。

今後の研究課題３：今後の取り組み方向の検討

研究課題３は、研究の過程で明らかになる部分が大きいと考える。また、到着地である高山市の観光サービスの供給面ばかりではなく、出発地である全国他地域から高山を訪問する観光客という需要面を考慮する必要がある。また需要と供給をつなぐ役割を担っている旅行サービス業者の存在も重要であり、興味深い。高山のバリアフリーは、果たして他の地域からどのように見られているのであろうか（あるいは高山のバリアフリーは知られていないのであろうか)。

現時点で予想される方策・問題点としては、以下のものがある。

方策１：高山市という「点」から、飛騨地域という「面」への展開が重要。
観光においては「線」あるいは「面」で観光地を売ることが重要というが（片岡吉則（236))、白川郷、飛騨古川、下呂温泉などの飛騨地域へのバリアフリーの展開をどう実現するか。バリアフリーで地域間協力が可能かどうかを検討したい。

方策２：ホテル・旅館の実績はバリアフリーの実績はあるが、では民宿でバリアフリーが可能か。
資本力が小さく、人手の少ない民宿や小規模旅館でバリアフリーは可能か。つまり、中小事業所でバリアフリーサービスの提供は可能か。

方策３：他の観光地のバリアフリー化が進んでいる。今後、高山市独自の福祉観光都市の良さをいかにPRするか。

その他の研究方向の一つとして、もし時間的に余裕があるならば、他の観光地、特に地方の観光地から見て、見習うべき先進モデルになっているかどうか、を検証することがある。すなわち、役立つ先進モデルか否かの検証である。

６．まとめ

筆者の岐阜県高山市の福祉観光政策に関する今後の主な研究課題は、（１）2003年から現在までの福祉観光政策（バリアフリー施策）の展開を整理し、（２）果たして福祉観光

政策が成果を挙げてきたか否かを検証し、（３）今後の一層の発展を図るには福祉観光政策をどのように展開したら良いかを考える、ということである。

本研究ノートの研究課題は、その準備として、以下の３つの課題に取り組んだ。

研究課題１：筆者の飛騨地域、高山市に関する先行研究を整理すること

筆者は14本の著作論文があるが、①人口移動と地域経済の研究、②観光地の特徴の研究、③観光地間と観光地内の競争と協力の実態把握、④観光産業の中小企業の研究、⑤観光消費額の経済波及効果の研究、⑥外国人観光客増加に関する研究、⑦統計データによる実態把握の研究がある。

研究課題２：高山市観光に関連する先行論文あるいは一般文献を整理すること

学術論文として26本を見出し、一般的な文献として42本を確認した。1990年代から2010年頃までは障がい者や高齢者のバリアフリーに関する報告が多いが、2005年頃から外国人観光客に関する報告が増加した。本研究で見出したバリアフリー観光の初出文献は、山本誠（207、1998年）である。モニターツアーが始まったのは1996年であるので、その２年後に一般の文献が登場していることとなる。

研究課題３：今後の福祉観光政策を展望すること

今後の研究課題を以下の３課題について検討した。今後の研究課題１：高山市の「福祉観光」（バリアフリー観光）の経過と実態の整理、今後の研究課題２：高山市においては、障がい者、高齢者の観光客が実際に増加したどうかの検証、今後の研究課題３：今後の取り組み方向の検討。

これらの研究課題について、観光客（需要サイド）と観光産業である旅館・ホテルなど（供給サイド）ごとについて、取材による接近、統計データの分析による接近などの検討を行った。

注

（１）『暮しの手帖』（No.72（1963年冬）、pp.5-23、1963年12月）に掲載された「山のむこうの町　日本紀行　その２　飛騨高山」は著者名がない。しかし花森安治と思われる。例えば高山市教育委員会編『市制施行60周年記念誌　高山のあゆみ』（1996年11月、高山市発行）の89ページに「昭和38年（1963）「暮らしの手帳」に“山のむこうの町”として花森安治が高山を紹介。」とある。

（２）日本建築学会建築計画委員会ハンディキャップ小委員会編、『障害者・老人を考慮した建築・設備等関連文献目録　昭和30年～昭和53年度・日本編』、社団法人日本建築学会、1973年９月。本書は書名に昭和30年からとなっているが、掲載されている最古の論文は昭和35年発行分である。

（３）梅川智也「2013年の「観光研究を振り返る」～日本観光研究学会を例として～」、コラム Vol.203、（公財）日本交通公社 Web ページ、2014年10月20日閲覧。

文献リスト１：伊藤薫の高山市・飛騨地域の関係論文

1．伊藤薫、「岐阜県の人口移動―岐阜県人口動態統計調査特別集計結果の分析―」、『経済学論纂』（中央大学経済学研究会）、Vol.47、No. 3 ・ 4 、pp.323-347、2007年 3 月.（大淵寛教授古希記念論文集への依頼論文）

2．伊藤薫、「岐阜県の人口移動（1954年～2005年）」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.7、No. 3 ・ 4 、pp.1-38、2007年 3 月.

3．伊藤薫、「岐阜県飛騨地域の人口移動－岐阜県人口動態統計調査の特別集計結果による分析－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.10、No. 3 ・ 4 、pp.1-45、2010年 3 月.

4．伊藤薫、「岐阜県飛騨地域の人口移動－2000年国勢調査集計結果による分析－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.11、No. 1 ・ 2 、pp.1-27、2010年 9 月.

5．伊藤薫、「岐阜県飛騨地域の人口と経済・産業について－人口減少と所得水準低下の相互関係の分析－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.11、No. 3 ・ 4 、pp.25-66、2011年 3 月.

6．伊藤薫、「岐阜県飛騨地域の観光産業について－白川郷と下呂温泉を例として－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.12、No. 3 ・ 4 、pp.1-26、2012年 3 月.

7．伊藤薫、「岐阜県飛騨地域の観光産業について－高山市を例として－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.13、No. 1 ・ 2 、pp.35-63、2012年 9 月.

8．伊藤薫、「観光地間と観光地内の競争と協力について－岐阜県飛騨地域のケーススタディー」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.13、No. 3 ・ 4 、pp.21-45、2013年 3 月.

9．伊藤薫、「飛騨地域の観光消費の経済波及効果について－2005年飛騨地域産業連関表を利用して－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.14、No. 1 ・ 2 、pp.35-59、2013年 9 月.

10. 伊藤薫、「飛騨地域の観光産業とグローバル対応－外国人観光客の増加は可能か－」、塩見治人・梅原浩次郎編著『名古屋経済圏のグローバル化対応－産業と雇用における問題性－』晃洋書房の第11章、pp.215-233、2013年10月.

11. 伊藤薫、「グローバル経済と飛騨地域の観光産業－外国人観光客の増加は可能である－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.14、No. 3 ・ 4 、pp.63-93、2014年 3 月.
12. 伊藤薫、「全国と飛騨地域の観光客数の実態－その統計的側面を含めた分析－」、『国際地域経済研究』（名古屋市立大学経済学研究科附属経済研究所）、第15号、pp.93-113、2014年 4 月.
13. 伊藤薫、「観光地間と観光地内の競争と協力－岐阜県飛騨地域のケーススタディー＜報告要旨＞」、『日本中小企業学会論集』（日本中小企業学会）、No.33、pp.265-268、2014年 7 月.
14. 伊藤薫、「飛騨地域の観光地間と観光地内の競争と協力－中小企業を中心とする実証的分析－」*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.15、No. 1 ・ 2 、pp.49-72、2014年 9 月.

文献リスト２：高山市観光に関する研究論文

（学会誌などに掲載された研究論文）

101. 佐古井貞行、「自治体計画への住民参加の検討－高山市における住民活動の事例から－」、『国民生活研究』、Vol.13、No. 4 、pp.1-13、1974年 3 月.
102. 澤誠、「潤いのあるまちづくり－高山市－」、『都市計画』、No.134（まちづくりと景観整備＜特集＞－先進自治体における実践と今後の課題）、pp.66-69、1985年 2 月.
103. 橋本俊哉、「徒歩スケールの観光回遊に関する研究－飛騨高山での外国人観光者の回遊実態の分析－」、『観光研究』、Vol. 5 、No. 1 ・ 2 、pp.11-20、1994年 3 月.
104. 井上浩、「高山の観光とその振興についての一考察」、『東京交通短期大学研究紀要』、No.10、pp.83-95、2000年 6 月.
105. 宮井久男、「バリアフリー観光の展開と課題」、『岩手県立大学宮古短期大学部研究紀要』、Vol.11、No. 1 、pp.7-19、2000年 9 月.（第 3 節に高山市の紹介がある）
106. 菊池達夫、「岐阜県高山市における観光行動の特性とその形成構造－伝統的建造物群の観光的活用に着目しながら－」、『観光研究論集』、No. 2 、pp.37-45、2003年11月.
107. 土野守、「安全、安心、快適なバリアフリーのまちづくり」（第 6 回日本福祉のまちづくり学会全国大会、テーマ：総合政策としての福祉のまちづくり、基調講演、2003年 7 月17日－18日、高山市民文化会館）、『福祉のまちづくり研究』、Vol. 5 、No. 2 、pp.1-6、2004年 1 月.
108. 土野守・秋山哲男・高橋儀平・米満弘之・澤村誠志、「福祉の安全、安心、快適なバリアフリーのまちづくり」（第 6 回日本福祉のまちづくり学会全国大会、福祉のまちづくりの現状と将来展望　パネルディスカッション）、『福祉のまちづくり研究』、

Vol. 5 、No. 2 、pp.6-10、2004年 1 月.
109. 小瀬光則、「情報バリアフリーのコンセプトと観光情報システムの導入」（第 6 回日本福祉のまちづくり学会全国大会、セッション 2 a「高山市のまちづくり」)、『福祉のまちづくり研究』、Vol. 5 、No. 2 、pp.14-15、2004年 1 月.
110. 小林一輝、「ホテルにおけるユニバーサルルームの考え方“高山グリーンホテルの取り組み”」（第 6 回日本福祉のまちづくり学会全国大会、セッション 2 a「高山市のまちづくり」)、『福祉のまちづくり研究』、Vol. 5 、No. 2 、p.15、2004年 1 月.
111. 大樹玄承・岸野洋子・田中彰・多淵敏樹、「文化財のアクセスとバリアフリー」（第 6 回日本福祉のまちづくり学会全国大会、研究討論会（ 1))、『福祉のまちづくり研究』、Vol. 5 、No. 2 、pp.27-30、2004年 1 月.
112. 津田恵一、「国際観光都市を目指した飛騨高山の取り組み」、『運輸と経済』、第64巻 5 号、pp.39-44、2004年 5 月.
113. 和田章仁、「飛騨高山における観光振興とホスピタリティに関する考察」、『HOSPITALITY』、No.12、pp.13-19、2005年 3 月.
114. 猪熊ひろか、「バリアフリー化された「まち」を「手段」として捉えること－岐阜県高山市バリアフリーのまちづくりを事例に」、『現代社会理論研究』、No.15、pp.349-358、2005年10月.
115. 蟹井進、「プロジェクト・ノート143　情報バリアフリー実証実験（高山市の事例)」、『都市計画』、No.260、pp.72-73、2006年 4 月.
116. 土田夢子・羽生冬佳、「地域紙「高山市民時報」の記事にみる観光まちづくりに対する住民の意見の変遷」、『都市計画論文集』、Vol.41、No. 3 、pp.439-444、2006年10月.
117. 源野武尚・片柳澄明・和田章仁、「飛騨高山における地域の活性化と観光振興に関する考察」、『HOSPITALITY』、No.15、pp.123-129、2008年 3 月.
118. 垣内恵美子・奥山忠裕、「文化観光の経済効果－岐阜県高山市伝統的建造物群保存地区の事例」、『文化経済学』、Vol. 6 、No. 3 、pp.137-145、2009年 3 月.
119. 臺純子、「高山市におけるインバウンド振興」、『日本観光研究学会全国大会学術論文集』、No.24、pp.113-116、2009年11月.
120. 片柳澄明・和田章仁、「観光活性化に向けた交通課題に関する研究－飛騨高山を事例として」、『HOSPITALITY』、No.17、pp.75-83、2010年 3 月.
121. 助重雄久・飛騨高山観光調査グループ、「東海北陸自動車道全通後における飛騨高山観光の動向と課題」、『富山国際大学現代社会学部紀要』、No. 3 、pp.139-152、2011年 3 月.
122. 菊地淑人、「高山市三町重要伝統的建造物群保存地区における観光関連事業の現状と課題－観光関連事業者へのアンケート調査－」、『日本建築学会技術報告集』、Vol.18、No.38、pp.309-312、2012年 2 月.

123. 森田美佐子・川原晋、「観光地におけるバリアフリーの考え方と進め方に関する研究：高山市の行政主催モニターツアーと市民まちづくり活動に着目して」、『観光科学研究』、（６）、pp.95-101、2013年３月.
124. 畠山輝雄、「高山市におけるインバウンド観光の実態と地域への影響」、『研究紀要』（日本大学文理学部人文科学研究所）、No.85、pp.105-125、2013年３月.
125. 森嶌由紀子、「岐阜県高山市の福祉観光事業」、川村匡由・立岡浩編著『観光福祉論』、ミネルヴァ書房、pp.159-171、2013年11月.
126. 澁谷鎮明、「ふたつの高山：海外からの団体ツアー客・個人客の視点と観光行動」、『貿易風－中部大学国際関係学部論集－』、No.９、pp.234-247、2014年４月.

文献リスト３：高山市観光に関する一般的な報告

（一般誌などに掲載された報告及び観光関連冊子）

201. 著者名記載なし（花森安治と思われる）、1963、「山のむこうの町　日本紀行　その２　飛騨高山」、『暮しの手帖』、No.72（1963年冬）、pp.５-23、1963年12月.
202. 高山市企画調整部、『観光の波及効果分析－高山市における観光の影響－』、1983年６月.（初版は1981年３月発行）
203. 岸武雄、『市長さんとゆかいな子どもたち』、ひくまの出版、1986年12月.（本書は、高山市の子ども会が宮川の清流を取り戻す活動を記録したもの。著者は岐阜教育大学教授。）
204. 田中彰、「わがまちの教育・文化19　町並み保存は住民主導で」、『文部時報』、No.1377、Vol.57、No.９、pp.57-59、1991年９月.
205. 土野 守、「高山市三町伝統的建造物群保存地区の防災への取り組み」、『消防科学と情報』、No.50、（特集 防災まちづくり（３））、pp.16-20 1997年10月.
206. 蓑谷穆、「飛騨高山の歴史・文化・まちづくり・観光」、『運輸と経済』、Vol.57、No.２、pp.74-82、1997年２月.
207. 山本誠、「福祉観光都市を目指して」、『観光』、No.382（特集 すべての人が旅を楽しむために）、pp.24-29、1998年７月.
208. 毛利甚八、「飛騨高山、バリアをはずす試み」、『旅』、JTB、Vol.74、No.３、pp.143-146、2000年３月.
209. 飛騨高山観光客誘致促進東京事務所、「住みよい町は行きよい町－バリアフリーの福祉観光都市を創る高山市－」、『ノーマライゼーション』、Vol.20、No.８（特集 旅に出よう）、pp.24-27、2000年８月.
210. 土野守、「わが市を語る　高山市(岐阜県)　安心・安全・快適なバリアフリーのまちづくり－二十一世紀の福祉観光都市を目指して－」、『市政』、Vol.49、No.９、pp.69-

71、2000年 9 月.

211. 山本誠、「地域社会の動向 「生活併存福祉観光都市」を目標に－バリアフリーのまちづくり－高山市」、『エイジング』、Vo.19、No. 2 （2001年秋号）、pp.14-18、2001年 9 月.

212. 宮井久男、「ユニバーサルデザインによる観光地ルネッサンス」、波田永実編著、船橋邦子・田村太郎・宮井久男・小暮宣雄・北岡敏信、『自治体政策とユニバーサルデザイン』、学陽書房、pp.77-109、2002年 8 月.（第 5 節に高山市の紹介あり）

213. 土野守、「バリアフリー政策に終わりはない－インタビュー 土野守 岐阜県高山市・市長」、『建築ジャーナル』、No.1051（特集 トイレからみたまちとバリアフリー）、pp.28-31、2003年 9 月.

214. 山本誠、『モニターが創ったバリアフリーのまち　高山市まちづくりレポート　住みよい町は行きよい町』、ぎょうせい、2003年10月.

215. 清水敬、「住みよいまちは行きよいまち（福祉観光都市をめざして）」、日本トイレ協会編、『「第19回全国トイレシンポジウム」高山大会　『トイレが創る住みよいまちシンポジウム』資料集』、pp.97-100、2003年11月.

216. 安藤裕、「連載 Report「挑戦」自治体（32）福祉観光都市を目指し、バリアフリーのまちづくりを推進－岐阜県高山市」、『ガバナンス』、No.33、pp.88-91、2004年 1 月.

217. 井上滋樹、「第5章　ユニバーサルサービスタウン」、『ユニバーサルサービス』、岩波書店、pp.159-185、2004年 5 月.（高山市の取り組みの紹介が、本書の160ページから172ページにある）

218. 津田恵一、「国際観光都市を目指した飛騨高山の取り組み」、『運輸と経済』、Vol.64、No. 5（特集 インバウンドにみる観光の課題と展望)、pp.39-44、2004年 5 月.

219. 山本誠、「安全・安心・快適なバリアフリーのまちづくり－福祉観光都市高山市の取り組み」、『地域開発』（特集 バリアフリーとまちづくり）、No.479、pp.37-42、2004年 8 月.

220.「暮らしを変えるユニバーサルデザイン③　車椅子で散策する「飛騨高山」　バリアフリーの町を思いのままに楽しむ、母娘 3 代・水いらずの旅」、『婦人公論』、Vol.90、No.23（通巻1189号）、pp.103-107、2005年11月.

221.（財）自治研修協会・自治大学校教授室編、「高山市の事例」、（財）自治研修協会・自治大学校教授室編『共生と交流のまちづくり ： 千葉県の事例・大分県の事例・石川県金沢市の事例・岐阜県高山市の事例 ： 課題研究用事例』、自治総合センター、pp. 143-183、2005年 3 月.

222. 高山市企画管理部企画課、「誰にもやさしいまちづくり～福祉観光都市を目指して～」、『国土交通』、No.57（特集　ユニバーサルデザインと国土交通行政）、p.29、2005年 9 月.

223. 山本誠、「高山市のまちづくりについて」、日本トイレ協会編『第21回全国トイレシンポジウム　資料集』、pp.21-24、2005年11月.
224.「コミュニティのちから（４）ユニバーサルデザインの発想で福祉観光都市を目指す－岐阜県高山市」、『月刊ケアマネジメント』、Vol.17, No. 7 、pp.6-9、2006年７月.
225. 國枝利久子、「世界に誇る観光ブランド「飛騨高山」の実力」、『レポート2008』、共立総合研究所、No.123、pp.27-31、2008年７月.
226. 土野守・白石真澄・古田千尋・鈴木誠、「まちづくりシンポジウム in 高山　市民とともに世界に発信！　ユニバーサルデザインの都市・高山」、『地域経済　創立40周年記念号』（岐阜経済大学地域経済研究所編）、pp.87-111、2008年３月.
227. 佐々木一成、「第15章　歴史的町並みの観光」、佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり　地域ツーリズムの展望』、学芸出版社、2008年５月.（本書の174ページから178ページに高山市の紹介がある）
228. 山本誠、「地域のチャレンジャー　仏ミシュラン観光ガイドで３つ星　バリアフリー推進が高齢者・外国人呼ぶ」、『日経グローカル』、No.95、pp.46-47、2008年３月.
229.「市政ルポ 高山市（岐阜県）　誰もが暮らしやすいバリアフリーのまちづくりを目指して－進化し続ける三つ星国際観光都市の試み」、『市政』、Vol.57、No. 6 、pp.2-3及び pp.40-51、2008年６月.
230.「PHOTO　REPORT 飛騨・高山はバリアフリーな観光地　車いすの旅も快適」、『介護保険』、No.151、pp. 3 - 7 、2008年９月.
231. 土野守・森隆男、「わがまちの障害福祉計画　岐阜県高山市　岐阜県高山市長 土野守氏に聞く 世界に範たるバリアフリー都市・観光福祉都市“高山”」、『ノーマライゼーション』、Vol.29、No. 9 、pp.34-37、2009年９月.
232. 高山市企画管理部企画課、「フォーラム2010 「ESCAP アジア太平洋・2009バリアフリー高山会議」の報告」、『ノーマライゼーション』、Vol.30、No. 2 （通巻343号）、pp.43-45、 2010年２月.
233. 高山市上三之町町並保存会編、『美しい町並を保存するために（町並整備申し合わせ事項・追補版）』、2010年５月.（初版は1993年12月発行）
234. 秋山哲男・松原悟朗・清水政司・伊澤岬・江守央、「第３章　街を歩いて楽しめるユニバーサルデザイン事例　3.9　岐阜県高山市－歴史的観光地」、『観光のユニバーサルデザイン　歴史都市と世界遺産のバリアフリー』、学芸出版社、pp.110-114、2010年４月.
235. 古池嘉和、「第４章　都市農村交流－対立を越え、融和の舞台へ」、古池嘉和『地域の産業・文化と観光まちづくり　創造性を育むツーリズム』、学芸出版社、2011年１月.（本書の136ページから144ページに高山市が紹介されている）
236. 片岡吉則、「「国際観光都市　飛騨高山」の観光戦略」、『平成22年度　観光実践講

座　講義録　街を活かす　街を楽しむ』、（財団法人）日本交通公社、pp.61-74、2011年3月.

237. 西永勝己、「まちの「空気」を感じてもらう観光地づくり－高山市における歴史的風致維持向上計画の活用」、『月刊建設』、Vol.55、No. 8（特集 観光立国の実現）、pp. 31-33、2011年8月.

238. 古賀方子、「飛騨高山社会実験「古い町並」とおりゃんせプロジェクト報告－「古い町並」の回遊性向上に向けて」、『月刊建設』、Vol.55、No. 8（特集 観光立国の実現）、pp.34-36、2011年8月.

239. 鈴木勝、「観光による地域活性化事例(第2回)「多国語発信」と「観光統計」に秀でた観光戦略シティー岐阜県高山市」、『地銀協月報』、No.616、pp.36-39、2011年10月.

240. 日本観光振興協会編集、『バリアフリー　TRAVEL　DATABOOK　甲信越静・北陸・東海編』、（社団法人）日本観光振興協会、pp.60-63（高山市の紹介部分）、2012年2月.（この冊子に、高山グリーンホテルはわずかしか紹介されていない。詳しい紹介は公的機関ばかり。）

241. 商工中金経済研究所、「高山市商店街振興組合連合会 スマホが高山の観光案内 IT活用の情報発信で賑わいを」、『商工ジャーナル』、Vol.38、No. 3（特集 スマホで広がるビジネスチャンス）、pp.26-28、2012年3月.

242. 日本商工会議所、「ニーズに応えたまちの整備と積極的な情報発信を進めて誘客に成功：岐阜県高山市」、『石垣』（日本商工会議所）、Vol.34、No. 2（特集 新たな観光客を引きつけろ！にぎわい創出のカギは“外国人”）、pp.15-17、2014年5月.